寛永諸家譜

清和源氏庚八冊之内
義光流之内武田流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (44)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

松平

寛永諸家系図傳

清和源氏

義光流

武田流

松平

先祖蜂須賀氏称号をもちゐるとも
ども志摩守広廣時よりこれ
らをもて松平と号す又武田氏
族といふ中比千鴻よ

庚八

浅草文庫

住をるものを和多利堂と号す此
時私おもうに東井日海西井日海
人宅民家に行くとこども夷蜂起
して志津城を太郎左衛門箱破
城を和賀寺松前城を相原
国治寺三の丸城を義別治部太
郎上田城を蜂須賀大夫此二
人をを堅固に城をまもりて是よ
り五寸の形義別武田大膳大夫
国信城嫡男太郎信廣父と不和の
事にて義別を立て高人城
を攻よりれ夷又蜂起して下田城を
攻城を
せめとらんとす時に信廣をたづね
よりて武方を引と物と夷の
渠魁二人を討とり賊徒数輩を
さうにんす是よりて凶徒とく

く敗走すうの治治大猶下ゑ
ゑ上ゑ上ゑ上ゑ会し酒宴
のとき修理大夫八来国俊の刀と
信廣より行ゑ治治大猶八菊一文字の
刀を信廣さうけてすれ勇功と賞
す修理大夫より女子ゑ行ゑ
故を女子を信廣より嫁せしめ家
贈とす光より徐ゑ武田の氏族と称
ゑるものなり

新羅三郎義光四代

信義

武田太郎　淺也位下　大膳大夫

信光

也郎　伊豆守

安藝也の守護

法名光蓮

信時

伊豆守　治部少輔

時綱

伊豆守　弾正少弼

信政

小五郎

信家

弥六郎　伊豆守　安房守護

信武

兵六郎　伊豆守　信濃守　常陸守

甲斐守　甲斐守護　九州探題

初軍号民部少輔

康永四年　天龍寺供養の時造畢と

なし

氏信

後ノ信乗トイフモノ　伊豆守　刑部大輔

甲斐国ノ守護

鹿苑院殿ノ御代ニ

信在

伊豆守　陸奥守　刑部大輔

信寿

伊豆守　治部大輔

ヨカラヌヨウニ家督ヲ半作盤ニ譲ル

信盤

伊豆守　治部大輔

鹿苑院殿普廣院殿ノ代ニ

信栄

兵九郎　治部少輔　若狭別当寺護
善廣院殿より出る
子なきゆえ依て家督を弟信賢へゆづる

信賢

大膳大夫　信興寺
受雲院殿益照院殿より出る
子なきゆえ又家督を弟國信へゆづる

國信

法名宗武　大通寺と号す

信廣

兵太郎　大膳大夫　治部少輔
益照院殿常泉院殿より出る
法名宗勲　玉華寺と号す

信廣

蜂須賀彦助　後に刑部　髪して清岩と
号す　生母若狭

勅諚修理大夫がむしろを要とされ
家を況ぐよりも勅諚を称号をもつて
主事沼松あれ影号を下し給ふ
上皇の敏を門よりおめく氏神正八幡大
菩薩を社を建立す
七十八業ふくれす

光廣

宮門世話　若狭守後ハ判官にして

泰光と号す　松ヶ丘ようまる
永正十四年上皇をいつたなつて相原国
防守が古城ようける
同十六年四月夷が賊徒蜂起す光廣
をうつとを以て賊徒強力人を敏め
うちへまゝ入くて酒をすゝめ興をすゝ
かし寶物をいぐして見せくれたの
寶物をとめていけうお酒をうぐひてうち
いろす仲が丸八文信廣ハ修理大夫

ひろし来国俊なり先ようりいよく寄
寶寺
同年大鏡ハ同じおなく氏神八幡宮
を建立す又地蔵山ハ鹿測海より山王
堂をなり　也十九業ふくれす

義廣

民部大輔　後ハ刑部卿して正四位と号す
松おようなり

或夜夷ひとりより城かハ柵の際よりなり
て鏡ハうりなせあいらんとす義廣先を
家して弓を引く数人を射おろす先ハ
後く城後夜中ハにげさる
大永七年阿吽寺を建立して彩形和
寺又天神ハ社なりびより羽黒堂をた
つ主後家督を嫡子季廣よりゆづりて
義廣ハ閑居す
享禄二年也月二十也日ハ夜大ハ雨

ゆみ夷まく義廣ゞ原右ゝ地測時ゝ鈴
をうごゝんとしてひうゝよ測時ゝ下の橋
をまゝる義廣ゞをおとをさいくゝゝ不を
うゝごゝく討けまい夷ゝゝる事を以寺
疫ゝけゝく光をゝんまバゝの矢鏃ゝ左
ゝ肩よゝけゝゝる右ゝ服よゝりてゝゝゝ
巻ゝたゝく羽ゝふゝゝをゝむ光義廣ゞ
弓勝ゝよゝをぐまきて壮年ゝ時ゝゝ法
ゝゝゝ強の弓をひくゝゝゝゝ

六十七歳ゝくゝ死す　法憧寺と号す

季廣

若狭寺　後ゝ剃髪して永安と号す
松前ゝうまる
天文ゝ初季廣屋疫ゝを法ゝゝゝ
ゝゝゝめぐらして東ゝゝ夷の弓限ゝ
ゝゝごゝく金銀重寶をゝゝゝ和議を
ゝゝゝゝ中ゝ騒ゝを事ゝゝゝゝ時世

多門丸也波志多院を作り西夷丸事
行と志利宇知丸也知古義多院を
作り東夷丸事りとして夷へ往来の
商人の法度をさだむ光より技術
と山二人丸也よりて仲技術方八法也
より夷へ渡来とする商人より光と出す山
技へよ光と夷役といふ山り事廣が時
ようけすまりう
同七年大鍬丸色境よりおのく光宿山

光廣

民部大輔　志摩守　伊豆守
従四位下　後ハ利髮して永泉と号す
松ようまりう
天正十六年四月十三日豊臣秀吉ハ謁
して秀吉丸命ようり志摩守と行むむ
文禄元年秀吉朝鮮出とうんあ

相現の社を建立す　七十二歳ハく死す

肥前名護屋より義弘朝鮮渡海
ありてこれ名護屋へいりまいりて
申す
同三年八月秀吉義弘に命じて夷
一国なりしより松浦を始めすべきの儀
をうけまつる中より流球へ渡
海とて商船渡海の儀が下知よりなるべし
若法よりもしくものいたりをもふけげ
て諫言すべきこれしものを津軽より
北海なりしより特別大坂よりいろいろ人数伝
る此第所とうまつる先又義弘が多年学
をけんで夷をとりしづめよりし
慶長元年
東照大権現と称しまつる
同四年松浦境内ふく要害地を
えらびて初めて新城をきずく同十一年
八月まいりて造畢す此地を名づけて
福山という

同十四年

大檜扇如仰ゝ御堂御堂

又紀す

同年 御繼同如御朱印二通を以載す

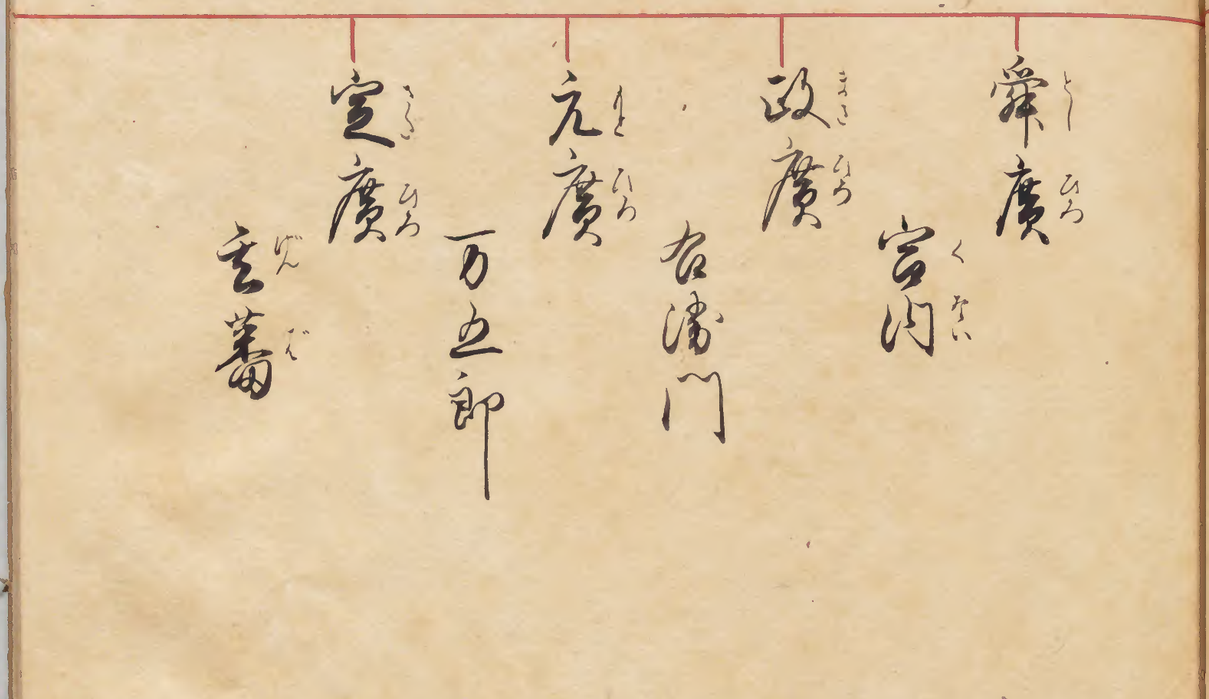
此時又清輔ゝ南部紀臺秋田酒田田

利仙北家上等よりいろくゝ吏僚の事

御朱印如文言のせく光をたまふ

宇須如若光寺を建立す

元和四年十月十二日死す七十二歳



信廣
但馬
吉廣
但馬守
忠廣
右馬守
京廣
主水

利廣
右馬門
先右馬門政廣ガ養子トナリ家を
ツグ
女子六人
みな松ぶようまち

盛廣
甚五郎
従五位下
若狭守

松ようまる
寛永元年父寛と同時に
大樹現を拝し奉る時に虎皮四枚ならびに
黄金五十両を盛廣に賜たまふ
同八年
大樹秀忠命に依て法皇位下に叙し奉る
に任ず盛廣法皇位下に叙し奉る事父寛
廣より先に蒙ものなり
同年

大樹現征夷大将軍に補じ給ふ時盛廣
御家門に仕奉を勤む
寛永十二年正月二十一日死す年三十七
法名月満宗園

行廣
長門
次廣
信十郎

種廣
数馬
等廣
作殿
政廣
市正
満廣
七次郎

女子二人
ひとり松前ようまる

元廣
甚五郎　松前志摩守　従五位下
松前ようまる
寛永十八年元廣十六歳にて
石城濱殿を拝し奉る時に従五位下に叙
志摩守に任ぜられ称号を松前と

行うこと

同年継目御御朱印を以載す

元和六年

台徳院殿黄金百枚を広廣へ下さる

松平金山を御領す 七年大坂以利倍

吉山伯耆守忠俊を召けるもの

鍋金九〇を広廣へ遣す 広廣悪顔

なくてけなる事を申す

寛永九年

台徳院殿薨御の時御遺物として銀子

三百枚を御領寺へ下ち

御軍家へ献ぜ 御入棺の儀を

勤む

同十四年三月廿八日広廣が居城炎上す

時に大鉄炮火薬の中へ入る 焔

四方へ散る 広廣英雄にまして

数ケ所の疵を加へる

同十七年六月十三日六郎へ竜田迄

津波にうしなひて人家とくくだらんなんし
古民なりしより夷等五百餘人おびただしく
同日内海北嶽炎上して玄庚屋宣月
みちふさがりて十四日の巳刻より十四
日午の刻よりうくる中間乗船とし
同十八年七月八日卒す年四十四
法名大藤宗憲

兼廣

民廣

右兵衛　松前より来る　号世

辯之助　生不詳

寛永十六年十一月十三日

初軍家より召しかゝる時より民廣十六歳

同十八年十二月十四日　鉤命より依く

父が家督をたぐ

同十九年三月三日　御暇をたまはる

陽出すおよそ祖父盛廣時より　御暇

をたまはるべきよし金銀長服等ひつまつり被
頂戴遂一ヨ見をもつて又毎度御奢
師松ヨ下向の時長服二十領を被
下松ヨりも又毎度此長袴ヨ御奢
を歎ず

泰廣

甚十郎　生母ヨ同し

寛永十六年十一月十三日先氏廣と同時
相軍家を拝し奉る時ヨ泰廣十五歳

同十九年三月先氏廣ヨ代く御戸ヨ
家継ず

猪廣

甚之郎　生母同ず

幸廣

石丸　生母同ず

女子

女子

女子
女子
女子

己巳同年生

家紋割菱（いへのもん わりびし）

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan